毎日新聞

保護者待ちや避難所運営体験

災害への備え学ぶ

小中学校

常総市内の全小中学校で3日、水害を想定した防災学習が行われた。同市は3年前の関東・東北豪雨で大きな被害に遭って以来、毎年この時期に防災訓練を行っており、今年で3回目。きょうだいが集まり保護者の迎えを待つ訓練や、避難所の運営を体験した。【宮田哲、鈴木加代子】

常総 水害 3年

常総市本石下の市立石下中学校では、校区内にある市立の3小学校と3幼稚園と合同で、年長のきょうだいが弟妹の元に駆けつけ、合流して一緒に保護者の到着を待つ防災訓練を実施した。

妹の手を引く児童＝常総市若宮戸の市立玉小で

きょうだいが集まることで、迎えに行く保護者の負担を減らすと同時に、児童生徒の防災意識を高める狙い。

石下中3年の飯島美咲さん(14)は北西約2キロの場所にある同市立玉小に自転車で向かい、体育館で同小6年の妹、和奏(わかな)さん(11)と合流した。「どこまで本当にできるか分からないけど、少し自信につながった」と話した。

同中の近納くに江校長は「弟や妹の面倒をみる中で、自分たちのできることを考えてほしい」と期待した。

◇

常総市小山戸町の市立水海道中では、3年生約90人が運営者役と避難者役になり、避難所の設営や運営を体験した。

組み立てた段ボールベッドの寝心地を確かめる生徒＝常総市小山戸町の市立水海道中で

校内に「具合の悪い人や障害のある人」「乳幼児連れの母親や妊婦」「それ以外」の3部屋を設け、運営者役の生徒たちは中に段ボールベッドを組み立てるなどした。

また避難者役の生徒たちは、「車椅子利用者」「気分が悪い」などの設定で、それぞれの状態に合った部屋に誘導された。

佐藤愛花(まなか)さん(14)は「病気の人を気遣うなど、避難してくるさまざまな人に合わせて対応する大切さが分かった」と話した。